📖 ブックリスト 📖

1）横浜市職員　佐々木聖嬰さん

「外国につながる行政職員のチャレンジ」

2011年3月、15歳の時に中国から日本に移住しました。頑張って日本の高校・大学へと進学し、大学1年の時に外国人住民を支援するボランティア活動を始めました。それをきっかけに、外国籍住民を取り巻く日本社会の課題が見えてきました。2020年4月から横浜市の職員となり、外国人としては初めて戸籍課に配属されました。周りの人たちがもつ外国人へのイメージを変えたい、日本人にできないことにチャレンジしたい、という想いで働いています。しかし、窓口や電話応対で外国人ということで相手にされず、悔しさ・悲しさを経験することもあります。私が今くじけずに頑張れるのは目標と夢があるからですが、この環境で頑張り続けること、そして私の目標と夢そのものが特権がないマイノリティ性を表しているのではないでしょうか。今回はそのような私の経験についてお話ししたいと思います。

2）夜間定時制高校教師　笹山悦子さん

「自分の弱さを知ることから見えるもの」

私は夜間定時制高校の教員をしています。41年間の教師人生のなかで常々感じるのは、行政や学校、そして地域住民の当事者性のなさです。外国にルーツのある子どもたちは、学校での受け皿もなく地域での受け皿もない状況です。学校だけでは支援しきれないため、縦割りの枠を超えた協力が必要です。外国にルーツのある子どもや地域に住む外国人を支援する「いっぽ教室」をたちあげたのもそのような思いからです。今はマジョリティかもしれませんが、このコミュニティから一歩外に出ればマイノリティになるかもしれません。もし自分がマイノリティになったらどのようなことをしてほしいか、そのことを考えて活動したいと思っています。

3）宗教家　小野常寛さん

「多様な人たちの第3の場所づくりに励む宗教マジョリティ」

祖父、父、を継いで、私で43代目の寺の住職です。大学で文学部、アメリカ留学、一般企業での社会人経験を経てお寺を継ぎました。宗派は天台宗。日本仏教の中でも歴史が古く、人々から馴染まれているマジョリティです。企業などからの講演依頼もあります。日本では、初対面でも哲学や宗教のお話をしても相手に身構えられることがなく、すんなりと信頼を得られるのが仏教です。そして、その中でも特に比叡山は多くの人がご存知でオーセンティックに感じます。檀家さんは安心感を持ってお宅に招いてくださいます。

檀家制度がなくなりつつある現在、若い世代の人にも、どんな宗教の人にも安心して気軽にお寺に来てもらえるように、知人のお寺でCAFÉを営業したり、座禅をオンライン配信したりして、「第3の場所」づくりを努めております。

📖ブックリスト📖

4）地域日本語教育者　式部絢子さん

「地域日本語教育者が感じたマジョリティの中のマイノリティ」

私は日本国籍で、日本で育っていますが、自分自身を「マジョリティの中のマイノリティ」だと認識しています。その意識は小中学校時代の転校、転校先の教師からの嫌がらせ、高校での多国籍クラス、非正規雇用などなど…という経験から来ています。日本社会からちょっとずつズレたところで生きているという感覚を持っています。ですから、海外で仕事をしていた時は思いっきりマイノリティで逆に気持ちが良かったくらいです。
私は、「地域日本語教育」に関心があります。当時も今も（?）「地域日本語教育＝ボランティア」の図式が強く、仕事として関わりたいと思っても爪弾きにあうという点でも、みんなと歩調が合わず、なんとなくマイノリティだと感じています。
今回のテーマは「日本人としての特権」なのですが、「マジョリティの中のマイノリティ」という考えは、もしかすると、特権の中の特権を行使しているということなのでしょうか…?! 続く。

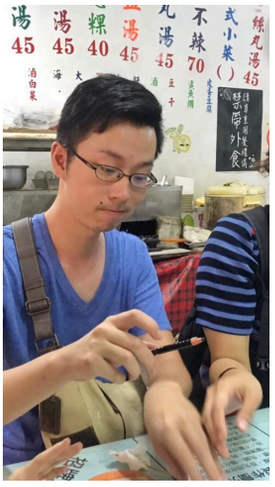
5）日本と朝鮮半島の歴史について考える若者　牛木未来さん

「マジョリティの視点から見る日本と朝鮮半島」

現在、大学院で朝鮮近現代史を専攻しています。朝鮮半島の歴史に興味をもったきっかけは、私自身の無知のために韓国人の友達を傷つけてしまったことでした。日本と朝鮮半島の歴史を学び始めると、日本社会におけるマジョリティとしての自分自身の特権を感じるようになりました。日常で考えなくても済むことがたくさんあるのです。例えば、自己紹介、受験や留学、アルバイトなどの場面で、私は国籍について悩むことなく生活してきましたが、在日朝鮮人は日本で日常的に差別を受けながら、自分自身のアイデンティティに向き合わなければなりません。私は、人権問題として歴史問題を考えたいと思っています。日本と朝鮮半島に関わる疑問や悩みを一緒に話し合ってみませんか。

6）コンサルタント会社社員　柳田健吉さん

「二つのルーツから見えた特権」



私の父は日本人、母は台湾人です。日本で生まれ、幼少期までは台湾と日本を行き来する生活でした。「日本人」のような見た目から、「ハーフ」を理由にいじめられることはありませんでした。一方で、母は僕が子どもの頃、「ハーフがバレてはいけない」と言動に気をつけるようにことあるごとに言っていました。また私自身も、周りに他人がいる環境で母が台湾語や中国語を使うと、恥ずかしさから「使わないで」と言ったこともあります。しかし、中学生以降はハーフであることをポジティブに捉えられるようになりました。このように、日本での生活中は自分がハーフである意識を持つことが多かったです。一方で高校生以降、海外によく行くようになると日本人として見られる経験を通じ、日本人であることのメリットに気づきました。ところで、海外に行くうちに「●●人は親日的」というよく聞くフレーズに違和感を覚えるようになりました。このように私は「日本人としての特権」を、「日本ではハーフ」「海外では日本人」という二つのアイデンティティから話したいと思います。

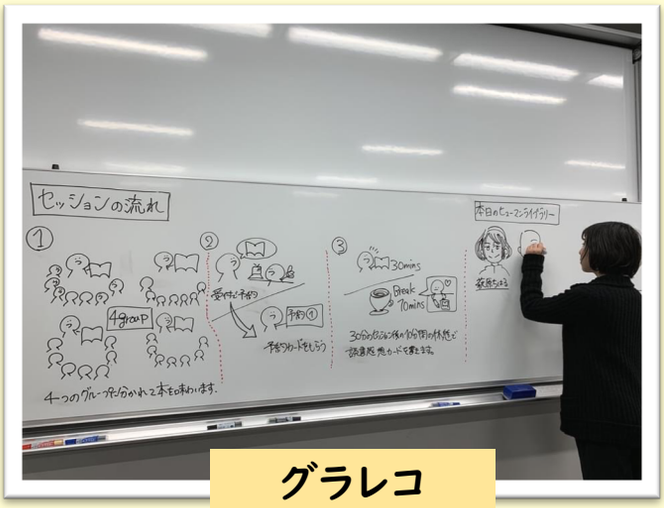
📖 ブックリスト 📖

7）欧州の移民大国ドイツを経験した人　井上真以子さん
「移民を受け入れるドイツと私の心に残るモヤモヤ」

大学でドイツ語を専攻していた私は、2年生の時に初めてドイツに行きました。友人を頼り、たどり着いたところは多くの移民の方々が暮らす町。至る所でドイツ語以外の言語が聞こえてきました。また、飲食店に関しても至る所にトルコ料理であるケバブ屋があり、私が抱いていたドイツのイメージとはあまりにかけ離れていて、、衝撃を受けました。移民に対する関心はその後の長期留学につながりました。1年間、その町に住みながら、日本人である私と移民してきたイラク人では、ドイツ人から浴びせられる視線が異なることを実感しました。こうしたドイツ人の感情は「理解できる」「理解できない」と言い切れるものではありません。いまだ私の心の中に残る「モヤモヤ」について、皆さんとお話したいと思います。

●当日は、談話室を設け、【多文化ひろば　あいあい】の活動紹介や読書感想会も行います。

●過去のヒューマンライブラリーの様子



グラレコ